

11月 2日 (日) 創世記 3章	「アダムは女をエバ(命)と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた」(20－21節)。神の命に背き、エデンの園を追われる二人。試練の中でアダムは女を「命」と呼んで新たに歩み直そうとする。その二人に添えられた神のやさしさ。過ち多き私たちにも神の皮の衣が添えられている。
3日 (月) 創世記 4章	「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない」(7節)。カインは自分の献げものに対する神の取り扱いに憤り、取り返しのつかない大罪を犯してしまふ。カインの間違ひは神に向けるべき怒りを弟に向けたこと。カインはヨブのように「なぜですか?」と神に問うてよかったのだ。まず神と向かい合おう。そこに罪を治めるカギがある。
4日 (火) 創世記 5章	「エノクは三百六十五年生きた。エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった」(23－24節)。エノクは一人だけ「神と共に歩み」「神が取られた」と記された人物。ヨブの「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」(1:21)が重なる。エノクは神から与えられた人生を通して、どんな賛美をささげたのだろう。そして、わたしはどんな賛美をささげる?
5日 (水) 創世記 6章	「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」(5－6節)。神の「後悔」はここにだけ出てくる特別な言葉。神の「心痛」はノアの洪水を経て、「人に対して大地を呪うことは二度とすまい」(8:21)という深い決意につながる。私たちはこの深い決意の中に生かされている。

6日 (木) 創世記 7章	「ノアは、すべて主が命じられたとおりにした」(5節)。この7章には「神が命じられたとおりに」という言葉が何度も出てくる。「ノアの洪水物語」には受け入れがたい部分が多くあるけれど、人間が悪を離れて新しくされるためにはどれほどの犠牲が必要か。私たちが自らの愚かさを見つめるための物語として受ける時、神の命令に従う厳しさがひしひしと迫ってくる。
7日 (金) 創世記 8章	「主は宥(なだ)めの香りをかいで、御心に言われた。『人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ』」(21節)。ノアたちは祭壇を築いて焼き尽くす献げものを神の前にささげた。洪水の悲劇を生かされた感謝と共に生かされた責任を覚えたことだろう。献げものは神の御心を聴く大切な機会でもあることを覚えたい。
8日 (土) 創世記 9章	「わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地との間に立てた契約のしるしとなる」(13節)。雨上がりの空にかかる虹を見ると、どうしてあんなにうれしくなるのだろう。自分では気づかないうちに私たちの心の中にノアたちの賛美が刻まれているのだろうか。神の慈しみと心の痛みと期待が込められた虹を、大切な「契約のしるし」として受け取っていきいたい。
9日 (日) 創世記 10章	「地上の諸民族は洪水の後、彼らから分かれ出た」(32節)。「創世記」は旧約の信仰者たちが、「今の我々の世はどのようにして成ったのか」を祈りとともに思い巡らしながら記した書と言える。「洪水」の痛みと、生存者ノアのスッキリしない人生を受け継いで、筆者たちが認識の限りを尽くして綴った多様な民族・家族の系図。各人の名と地域を辿ってみよう。